



ない かく そう り だい じん しょう
内閣総理大臣賞

「**ありがたいねえ。**」

宮城県涌谷町立涌谷第一小学校六年

なか むら さき
中村 早希

三日目、凍りつきそうになる両足をカタカタ震わせながら考えた。

（そうだ、あの日も、私はごはんを残していたんだ。しかも、私達の学年の残飯量は、毎日、目立っていた。）

あちらこちらから、せきをする音が聞こえ、避難所として用意された教室に響いた。そして、小さい子が泣き出す。

「おなかへったよお。」

その子達のお母さんが、二人をだっこして、教室の外へ出ていく。「すみません。」

小さな声だった。私は心の中で返事をする。

（誰も迷惑なんて思っていないよ。）

丸二日、食べ物をお口にしていない。突然、恥ずかしいという思いが押し寄せてきた。自分の意志で、食べ物をそまつにしてきたことに対する恥ずかしさ。

「え、本当に。やったあ、やったあ。」

「もらえるんだって、おにぎり。」

（うわあ、三日ぶりのごはんだ。）

配給されたおにぎりを両手を器にして、半分腰を曲げて受け取った。いや、頂いた。でも、あれほど待ちのぞんだおにぎり

なのに、食べるのがもったいないように感じられた。友達と、こんな会話をしながら、寒さや恐怖とたたかっていたのだ。「食べ物が食べられるようになったら、最初に何食べたい。」私達の答えは、三人とも、おにぎりだった。

この時、私の耳に入ってきた言葉、「ありがたいねえ。」

近くで窓の外をじいっと見つめながらおにぎりを食べていたおばあさんの言葉だった。この言葉によって、手の中のおにぎり、よりいっそう輝いて見えた。感謝の心が、つやつやと光っている。友達と顔を見合わせ、どちらからともなく、口にした言葉。

「食べるよ、食べるよ、せえのっ。」

口にしたおにぎりの味は、たぶん、一生忘れないと思う。

「二つ夢、かなったっちゃあ、私達。」

お米の味をかみしめながら、自衛隊の人に手を合わせ、何度も何度も（ありがとう。）を繰り返した。

今、思う。あの日のおにぎり、あれは希望だった。あのおにぎりがあつて、私がいる。おなかへった、と泣いていた二人の命がある。寒さとたたかっていたお年寄りの方々の命がある。あれは、千二百の尊い命を救った、まさに命のおにぎりだったと思う。多くの手と、その思いが実らせるお米だからこそ、私達に希望を与えてくれ、明日を感じさせてくれたのだと思う。支え、支えられるための力を生み出してくれたお米に感謝したい。

（ありがたいねえ。）